

Title	釋迢空『安乗帖』と田山花袋『南船北馬』：「海やまのあひだ」成立の一過程
Sub Title	Shaku choku's Anoricho and Tayama Katai's Nansen Hokuba : the genesis of Umi yama no Aida
Author	藤田, 叙子(Fujita, Nobuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1983
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.45, (1983. 12) ,p.45- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00450001-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

釋迢空『安乗帖』と田山花袋『南船北馬』

——「海やまのあひだ」成立の一過程

藤 田 叙 子

折口信夫「釋迢空の公刊処女歌集『海やまのあひだ』は大正十四年五月に改造社から、「現代代表自選歌集」の一冊として刊行された。この時迢空は三十九歳。既に歌誌『アララギ』等で活躍していた迢空にとって些か遅いデビューとも言えるのだが、この歌集には迢空短歌の特質である旅の歌が完成されており、アララギ風の写生歌とは全く異なるその独自の世界は当時の歌壇の注目をあつめた。

歌集『海やまのあひだ』が刊行されて程ない大正十五年一月、歌誌『日光』において、『海やまのあひだ』合評が企画されたが、そこで同時代の歌人、土岐善麿は「『海やまのあひだ』は読んでゆく内、きまっと一種の恐怖に心が沈んで暗い生命の底へ底へと流れこんでゆく」と言い、更に「『海やまのあひだ』は僕にとっておそろしい歌集だ。」と言っている。又、北原白秋は『海やまのあひだ』に代表される旅の歌に逸早く「かそけさ」、「ひそけさ」の寂寥感を感じとり、迢空を「黒衣の旅びと」と評した。⁽¹⁾

歌集『海やまのあひだ』で迢空が完成したのは正に白秋言うところの「かそけさ」、「ひそけさ」の境位であり、注目すべきはこの寂寥感が「旅」という場においてだけでなく、日常生活の底にも流れている点である。例えば、『海やま

のあひだ』所収の「人も 馬も 道ゆきつかれ死にゝけり。 旅寝かさなるほどの かそけさ」や「澤なかの木地屋の家にゆくわれの ひそけき歩みは 誰知らめやも」等の羈旅歌からは深い寂寥感が感じられるが、これは何も、人も通わない深山幽谷を唯一人行くという特殊な旅のみに限られるものではなく、全ての人が人生に対してふっと洩らす嘆息のような思いに重ってゆく。

本稿では、遙空短歌の原点とも言えるこうした境位がどのように形成されていったのか、遙空を特異な存在としてのみ突出させる事なく、なるべく同時代の文学の流れに引き戻しながら考察してゆきたいと思う。

I

『海やまのあひだ』は非常に大きな歌集であって、遙空短歌の様々な要素が含まれているが、その中心はやはり旅の歌にあると考えられる。旅の歌に秀逸な作品が多いという点からも、羈旅歌集の印象が強いのだが、抑々『海やまのあひだ』という歌集の題名自体が旅の歌に深く関わっているのである。後年遙空が、

私は町人の子である。人事に、心を動かされることが頗深い。若く自然に狎れきつて海山の間の遊行を娛しんだ。けれども山も海も見る為ではなかった。そこに営れるひそかな人生に触れたかったためらしい。

と述べているように、⁽²⁾「海やまのあひだ」という語は「海と山の間をゆく旅」という事であって、それは即ち遙空短歌の「かそけさ」、「ひそけさ」につながっている。

「海やまのあひだ」という語については、単に一歌集の題名としてより、遙空短歌における大きなテーマの一つとして考える事が必要であらう。このため本稿においては、歌集『海やまのあひだ』と記さない限りはテーマとしての「海

やまのあひだ」を指す事とする。

「海やまのあひだ」というテーマを遥空は非常に早い頃から考えていたようである。大正十四年の公刊歌集『海やまのあひだ』以前に、実は遥空には四種類の自筆歌集があるのだが、その内の一つの、大正二年成立の歌集に既に「うみやまのあひだ」という語がでてくるのだ。四種類の自筆歌集の成立年次は次の通りである。³⁾

○『安乗帖』……大正元年成立。

○『ひとりして』……大正二年成立。吉田洪一、田端憲之助、武田祐吉の三人に贈呈されたもの。

○『うみやまのあひだ』……大正四年夏以後成立。安藤英方に贈呈されたもの。

○『ひとりして』……大正四年成立。折口所蔵のもの。

又、一方では大正二年から公刊歌集『海やまのあひだ』刊行の大正十四年迄の間に、七種の羈旅歌の連作が「うみやまのあひだ」と題して、順次雑誌に発表されていた。

○大正二年七月十七日『日刊不二新聞』に「海山のあひだ」九首。

○大正二年八月三日『日刊不二新聞』に「海山のあひだ」五首。

○大正四年六月『国学院雑誌』に「海山のあひだ（一）」十九首。

○大正四年七月『国学院雑誌』に「海山のあいだ（マ）（二）」二十三首。

○大正九年五月『国学院雑誌』に「海山のあひだ―南九州の旅に」三十八首。

○大正十三年十月『日光』に「海山のあひだ」二十二首。

○大正十四年九月『短歌雑誌』に「島山」二十六首。内八首が『日光』発表の「海山のあひだ」の歌。

これらを順を追ってみてゆくと、逡空短歌における「海やまのあひだ」というテーマは常に固定する事なく、生成していることがわかる。その一応の集大成が歌集『海やまのあひだ』であるとみる事ができるだろう。

特に四種の自筆歌集は、テーマ「海やまのあひだ」の形成を考える上で重要な存在である。四種の自筆歌集に収められた歌は、互いに重複し合いながら、又、その内の或る歌は幾度かの改変を経ながら、歌集『海やまのあひだ』の一部分に組み込まれてゆくのだが、殊に第一自筆歌集の『安乗帖』については、逡空自身、『海やまのあひだ』の原型である事を言及しているので注目される。⁽⁴⁾

明治四十五年八月、二十六歳の時に逡空は大阪今宮中学の教え子二人を連れて、志摩・熊野へ十三日間の徒歩旅行をした。その旅でできた歌を同年冬、百七十七首にまとめたものが『安乗帖』なのである。

「海やまのあひだ」という語は元々、この時の旅で逡空が歩いた範囲——志摩から紀伊の日高まで——を指すものだった。大正二年成立の第二自筆歌集『ひとりして』は内容が四部に分けられているが、その第四部には「うみやまのあひだ」という小題が附されており、前書きによってそのテーマが明治四十五年の志摩・熊野の旅である事がわかる。又、第四部に収められた九十九首の内、八十五首までが『安乗帖』の歌を基としている。『安乗帖』自体には「うみやまのあひだ」という語は直接でてこないが、明らかに「うみやまのあひだ」は『安乗帖』から出発したテーマだという事ができるのである。

因に『安乗帖』と『ひとりして』第四部の冒頭部分を比較すると、次の通りである。

安乗帖

大正みものおもひの年 志摩より熊野路の旅にのぼる 八月の十三日より廿五日まで、その間十三日 従ひたるもの伊勢清志・上道清一

〔この間旅程が記されているが省略。〕

たびぐゝろもろくなり来ぬ 志摩のはて安乗の崎に 赤き灯の見ゆ
松ふた木ある その梢夕日さし なぞの岬か波白く散る
町のかど 木ぶねにおとす水の音 旅のねざめの耳にしたしき

——以下略。

うみやまのあひだ

第四部

あはれにもうちかゝふかな 山草の たぶさにしめる 夏のおもひ出
人、折口信夫・伊勢清志・上道清一
時、大正おほみものおもひの年八月
處、志摩の國より紀伊日高まで

たびぐゝろもろくなり来ぬ 志摩のはて安乗の崎に 赤き灯の見ゆ
わたつみの豊はた雲と あはれなる浮き寝の 晝の夢と たゆたふ
闇に聲してあはれなり 志摩の海相差の迫門に 盆の貝吹く

——以下略。

『折口信夫全集』第廿二卷⁽⁵⁾より。

大正元年の志摩・熊野への旅は後に沖繩の旅へとつながってゆくわけだが、学問・創作の両面で、折口信夫Ⅱ釋迢空に大きな方向を齎す契機となっている。この旅において、「うみやまのあひだ」というテーマが芽生え、一方学問の上では△妣が国Ⅱ常世Ⅱという事を実感している。若い心をゆさぶられるように感銘の深かったこの時の旅を、後年迢空は様々に回想しているが、次のような言葉は特に印象に残る。

○數年前、熊野に旅して、眞晝の海に突き出た大王ヶ崎の盡端に立つた時、私はその波路の果に、わが魂のふるさがあるのではなからうか、といふ心地が募つて來て堪へられなかつた。これを、單なる詩人的の感傷と思はれたくはない。これはあたゐらずむから來た、のすたるぢい（懷郷）であつたのだと信じてゐる。

（大正五年十一月号『アララギ』に發表の「異郷意識の進展」より。）

○明治四十五年―大正元年（二十六歳）八月、志摩・伊勢・紀伊に涉つて、熊野廻りをする。同行、生徒伊勢清志・上道清一の二人。（此時、）教育の意義を痛感する。『海やまのあひだ』第一稿はこの間に出来る。

（昭和十二年一月刊行『短歌文學全集・釋迢空篇』より。）

○ちやうど明治陛下の諒闇の夏であつた。心ひそかに旅するには、極めて適してゐた。この旅行は鳥羽を最初に、志摩から南北東西の牟婁郡、即、伊勢・紀伊の熊野に屬してゐる地方を、十日程の日數をかけて歩いたのであつた。伊勢清志・上道清一といふ、心の美しい生徒を二人連れて出た。心の底には、極度に敬虔な、教育者としての反省を持ちつゞけてゐた。其間に若い故の私の心は、感傷にゆすぶられるやうなことが多かつた。

（昭和二十八年に口述の「自歌自註」より。）

「海やまのあひだ」の形成については、その出発点となった『安乗帖』を考察する事が必要であらう。

II

『安乗帖』について、まず問題となるのはその題名である。「安乗」とは、志摩半島の安乗崎である事は歌集の巻頭に置かれた「たびごゝろもろくなり來ぬ 志摩のはて安乗の崎に 赤き灯の見ゆ」の歌からすぐ判るが、何故其を歌集の題名にまでしたのがわからない。同じ旅で立ち寄った志摩の大王崎については、その先端に立った時へ妣が国を視た、とまで言っているのに対し、安乗崎については何も触れていないのだ。志摩半島の小さな岬、安乗崎——この場所に対する遙空の思い入れはどこから来ているのだろうか——。

ここに、一つの手懸りが残されている。『安乗帖』成立の頃、遙空は大阪今宮中学に勤めていたが、同僚教師の石丸梧平に誘われて『日刊不二新聞』という大衆紙に頻りに文芸論や創作を発表していた。その『日刊不二新聞』大正三年一月二十八日の項に遙空は「一月の文壇（中）」と題して、田山花袋の新作の小説『一握の蘂』についての文芸時評を書いているのだが、そこにこんな一節がある。

……青年時代の花袋氏が行き逢ふ人も稀な熊野路の旅に道づれになった若い郵便脚夫と再度道にわかれて、淋しい旅行をつづけたあの頃の心もち（『南船北馬』）がこの『一握の蘂』に到って蘇って来た。啻にこの作に止らない、氏の力ある小説にはすべてこのうらはかない生活情調のあらはれてゐないものはない。氏はこの心もちの起ることによって常に浄められ、芸術や恋愛に対する敬虔の念に生きることが出来るのである。

熊野路の旅、という件から花袋の著作『南船北馬』と『安乗帖』の間に或る符合が感じられる。『南船北馬』のこの

箇所は遙空にとって忘れ得ぬものであったらしく、昭和十九年四月、弟子である加藤守雄の国学院大学講義のため口述した「明治文学論」⁶の中の、田山花袋の項でももう一度触れている。

……たとえば、彼の若い時分の紀行文において書かれた、熊野路の郵便脚夫の記述のようなものは、文章はなるほど、力の薄弱なものではあるが、そういう文にかこわれたしみじみした、明るい憂鬱な内容が、ほとんど、文章を他にしてわれわれの心を動かした。そして、いまでも思い出すごとに心を揺する、そういうよさは確かにある。

『南船北馬』は明治三十二年に博文館から刊行された花袋の最初の紀行文集である。その時、遙空は十三歳。遙空は少年時代に藤村や花袋の主な作品は殆んど読んでいたといわれているし、後年新潟の方へ旅行した折に、ふっと花袋の「再び草の野に」という小説の事が胸を掠めた、等と言っている⁷ので、花袋の作品にはかなり興味を持っていたらしいのだ。前述の「明治文学論」においても、

自然主義の陣頭に立って戦うようになった彼の作物が、やはり依然として昔の濃やかな紀行文の色彩を失わずにおり、静かな感激に輝いているような場合は、彼の作物だけがもっているよさに人を誘うたものである。

とあるように、かなり早い頃から花袋の作品、特にその紀行文に深い理解をもっていた事がうかがわれる。『南船北馬』も刊行されて余り日数の経たない内に、少くとも明治三十年代には当然読んでいたと考えてよいだろう。又、『南船北馬』の一部については、遙空は雑誌発表の段階で読んでいたと思われるのだが、その事については後で述べる。

明治三十一年三月、花袋は志摩・熊野へ旅をした。当時花袋は紀行文家として活躍し、地理にも興味のあったところから、旅に明け暮れる様な生活をしていたのだが、その中でもこの志摩・熊野の旅は感銘の深いものだったらしく、この旅を題材にした紀行文を次々に書いた。『南船北馬』所収の「志摩めぐり」「北紀伊の海岸」「熊野紀行」「月夜の和歌

浦」という四篇もこの旅に取材した紀行文である。

この四篇を順序立てて読む事によって花袋がどのように志摩・熊野を旅したのかわかるのだが、これを『安乗帖』の前書きと較べると、花袋と遥空の旅程がかなり似ている事が判明する。

志摩・熊野の旅における遥空と花袋の旅程の比較

——『安乗帖』の旅——（全集『安乗帖』による）

○宇治山田（参宮）——鳥羽——磯部（伊雑宮のたそがれ）——下の郷より船——安乗

○安乗——國分寺（國分松原）——鶴方——御座——濱嶋——田曾

○田曾——相賀——奈屋——神前——引本

○引本——船津——八町瀧——檜苗圃（花の木峠）——山中——木樵小屋

○大杉谷におつる大川——山中——木樵小屋

○——船津——引本——尾鷲ゆきの船に乗りおくる——尾鷲

○尾鷲——木本——鬼ヶ城——花岩屋——阿多和——小川口——玉置口

○玉置口——瀨八町——船にて宮井——楊枝村遠望——新宮

○新宮——三輪崎——那智——勝浦——田邊

○田邊——鉛山（斧原生待居る）

○鉛山——田邊——南部——岩代峠——切目——印南——鹽屋——御坊——天田橋——田端君家

○田端君家

○吉原——比井——和歌浦——和歌山——大阪

——花袋の旅——（『南船北馬』より摘出）

○二見の浦——日和山——鳥羽——磯部

○磯部——下の郷（舟で）——安乗——大王崎——御座（金比羅山）——濱嶋（舟で）

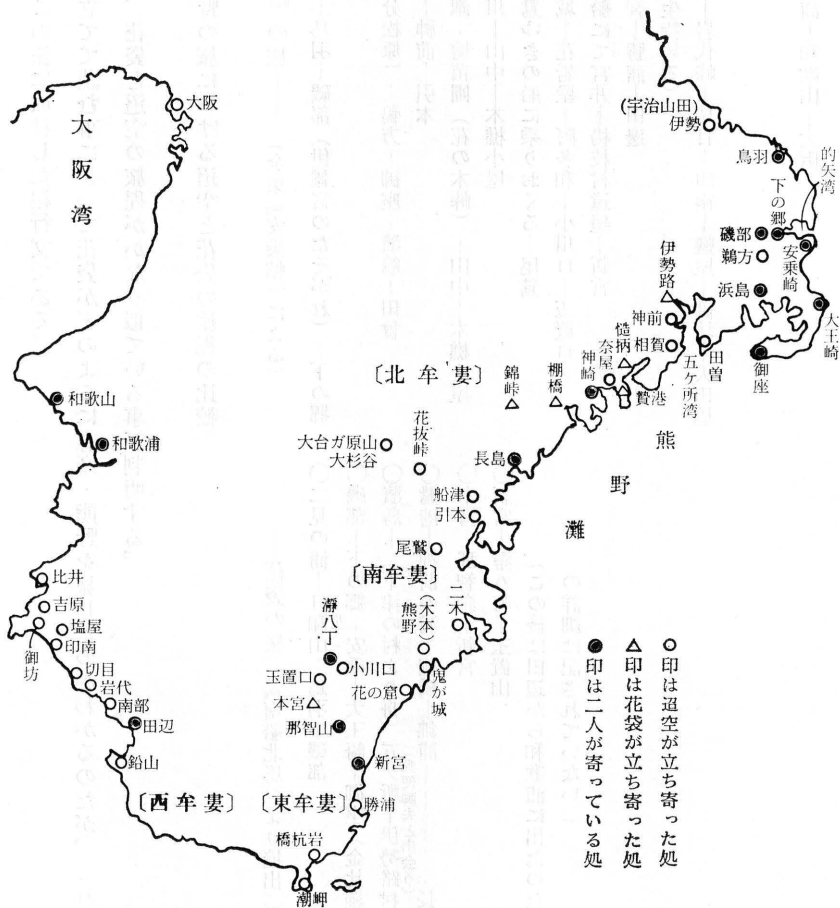
○濱嶋——（下津の村より舟）——五ヶ所——伊勢路村——槌柄——鷺港

○鷺港——神前の浦——棚橋——錦浦（郵便脚夫と出会う）——長島——新宮——三輪崎

○本宮——那智瀧——新宮

○新宮——瀨八町——玉置山

（この後は田辺から和歌浦に出たのだが、その間の旅程の詳細は記されていない。）



二人とも徒歩で紀伊半島を海岸沿いに右回りにゆき、途中の志摩では安乗崎や大王ヶ崎に立ち寄っている。『安乗帖』成立以前に遼空が『南船北馬』を読んでいたであろう事を考えると、これは偶然とは思われない。『南船北馬』は紀行文集であると同時に旅行案内書の要素も濃く、名所として寄るべき処やそこまでの道筋が詳しく書かれており、遼空がかなりそれを踏襲した形跡がある。『南船北馬』は携帯用に丈夫なクロス装幀がされ、大きさは丁度ポケットに入る位の本である。遼空がポケットに『南船北馬』を入れながら志摩・熊野を旅してゆく情景は充分想像できる。

更に特記されねばならないのは、花袋が安乗崎に対して抱いていた感慨の深さである。明治三十一年の旅の途、花袋は安乗崎の突端に聳える安乗燈台を訪ね、そこで一人の燈台守に出逢う。燈台守の淋しい生活は彼に強い印象を与え、その出逢い故に安乗崎は花袋にとって忘れ難いものとなった。小林一郎も、『田山花袋研究』⁽⁸⁾の中で、

この三十一年三月から四月へかけての旅の中でも、この「安乗崎燈台」の事は印象的なものであったのである。と指摘している。

花袋は安乗崎及びその燈台を訪ねた経験について書いた紀行文を何篇か発表している。初出の順にそれらを整理すると、次の様になる。

- 「志摩めぐり」……明治三十一年六月『太陽』に発表。明治三十二年刊行の『南船北馬』所収。
- 「安乗崎と日光の奥」……明治三十一年「太陽」に発表。明治四十二年七月『文章世界』に再発表。
- 「伊良湖半島」……明治三十二年刊行『南船北馬』所収。
- 「鳥羽より大阪へ」……明治三十五年六月『太陽』海之日本特集号に発表。この時花袋と並んで柳田国男が松岡梁北の筆名で、明治三十一年夏の伊良湖半島滞在を題材とした「伊勢の海」という紀行文を発表している。

○「南伊豆より」……明治四十二年三月十四日の『読売新聞』に発表。

○『日本一周（前篇） 東海道・畿内』……大正三年四月刊行。

これらの文章において安乗燈台守の姿は、時には当時花袋が愛読していたポーランドの作家、シエンキヴィッチの短篇「アスピンウォルの燈台守」の孤独な老燈台守の姿に重ねられ、時には東京生れの若者として語られている。「安乗崎と日光の奥」に曰く、

私の最も感興を惹いた山水、海では志摩の安乗崎の燈台の上からの矢湾の湧き返る怒濤を見た時である。……中略……シエンキヴィッチの「アスピンウォルの燈台守」を読んだ時にも安乗崎を思ひ出した。老いて世に勞れてその海角を唯一の安息所とした燈台守と、燃ゆる心を抱いてさびしく怒濤の音と千鳥の声とを友としてゐる若い燈台守とを比べて考へて見た。

『日本一周（前篇）』に曰く、

私は長い間その燈台を忘れずにいた。博文館の三階の室で筆を執っていながらふとその燈台を思ひ出したりした。ある友達はその燈台を想像して小説を書いた。それから私はシエンキヴィッチの「アスピンウォルの燈台守」という短篇を読んだ時にもそれを思ひ出した。その年取った生活に勞れたポーランド生れの老人と此処の老燈台守とを比べて考へて見たりした。その燈台守と安乗の漁村から松原の中を通って燈台に行く道とは、長く私の記憶に絡みついてゐる。いつまでも／＼絡みついて離れないだろうと私は思つてゐる。

「鳥羽より大阪へ」に曰く、

……その燈台に若い空想勝の青年。でなければ年老いて世の荒波に漂ひ果てた老爺。それが、静かに、穩かに、世

の中ではとても見る事を得ぬ迫らぬ態度で、海になやむ船人の爲めに、その夜毎の勤めを怠らぬさびしい生活——
どんなに空想に乏しい人でも、これを見ては、さまざまの想像を起さずには居られまい。

多少の変化は与えられているが、とにかく花袋は流浪の末、世から身を隠すために絶海のほとりで燈台守をしている、という様なはない人生を安乗燈台守の上に見ている。彼が深い感慨を抱いたのは、安乗崎の風景よりもその燈台守の淋しい人生についてなのである。

安乗崎について書いた花袋の一連の文章は明治三十一年から数年に亘って雑誌『太陽』を中心に発表された。「自選年譜」によると、⁽⁹⁾ 遙空は十三歳の時から父や兄のとなっていた『太陽』、『帝國文学』等の雑誌を愛読していた、とあるので、当然花袋がそれらに発表した文章も『安乗帖』成立以前に読んでいた筈である。少年時代に憧憬をもって読んだ花袋の一連の紀行文が遙空の『安乗帖』に深く影響している事は否めない。

花袋の一連の文章の中でも、特に『安乗帖』、及びそこから発した「海やまのあひだ」のテーマに深く関わっているのは『南船北馬』所収の「伊良湖半島」と「北紀伊の海岸」の二つの紀行文である。

「伊良湖半島」は『南船北馬』中でも、非常な名文であり、青年時代の花袋と柳田国男の親交を描いている点でも興味深い。志摩・熊野の旅にでた同年の夏、花袋は避暑のため伊良湖半島に滞在していた友人の柳田国男を訪ねる。柳田から来た、次のような書きだしの手紙に旅ごころを誘われたのだ。⁽¹⁰⁾

松原の月夜のさびしさ限りをしらず。今宵初めて小山に登りて対岸の安乗の燈台の火光を見候。御話の事悉く胸にかへ候。

御話の事、とは花袋が柳田に春の旅の事、特に感銘深かった安乗燈台について色々話した事を指すのだろう。今度は

逆に、柳田から伊良湖半島の様子を聞かされた花袋は矢も楯もたまらず、伊良湖を訪ね、柳田と数日を過ごす。「伊良湖半島」はその時の経験を題材とした紀行文なのである。

伊良湖半島に到着した花袋は早速柳田と夜の浜辺を散歩する内、手紙にあったように、対岸に安乗燈台の火光を見出す。「伊良湖半島」に曰く、

「見給へ」と、友は不意に口を開きて、「見給へ、神島の少し右に当りて、かの安乗の燈台の旋廻する火光の見ゆるに……」

「何処に……」

瞳を凝したれど、最早旋廻して見えざりき。

「待ち給へ、今見ゆべきに……」と友は又言ひしが、それよりまだ十秒も経ぬ間に、果して！ 暗碧なる波濤の上、花火線香とも覚しき程の微かなる火光、ちらと光りてやがて又消えぬ。

安乗燈台の火光を見た二人は自然とその火を点している燈台守の身の上に思いを致す。ここでは、燈台守は二人の若者として描かれている。

かくて猶二度三度火光の旋廻するを見やりたるが、「それにしても、此処に来て、今この我がかの二人の若き燈台守の点したる火を望みて、烈しく感じて居れりとは、二人は夢にも知りて居らぬなるべし」と我は遂に言ひぬ。

「然なり、まことに然なり」と、友もいたく感じたるさまにていふ。「その上、その二人の燈台守は、君が三月の某日に、その燈台を尋ねたりといふ事をも、今は己に忘れ居るに相違なければ、かく遠く望みてありといふ事の、たとへ向ふに通じたりとて、何の反響をも起さざるべし。人生にも」と友は言ひ淀みしが、「人生にも、これと同

じきようなるはかなき事いくらもあるべし。はかなしとは思ひ給はずや。」

其声はいと沈めり。

二人は黙して言葉なかりき。対岸の安乗の燈台の火光のみ、幾度となく消えては顯れ、あらはれては又消えぬ。

人生のはかなさに対する花袋の思いがうつくしい流露をみせている文章である。夜の浜辺から安乗燈台の火光を見出したこの経験は他の紀行文でも幾度か回想されている。

○……また、それから一二年経った後に、三河の伊良湖岬の鼻からその安乗の燈台の火光の旋廻するのを望んで、其時のことを追想したこともあった。

……「安乗崎と日光の奥」より

○そして、松原を出て了ったなら、足を留めて、神島の、その向ふに遠く微かに連り渡った志摩の山脈との間を見るが好い。月の夜にはその明かな光にまぎれて、それと分明に見出す事が出来ぬかも知れぬけれど――闇の夜には、その暗い物凄い波の上に、大凡一分間位づつ間を隔だて、線香花火のように、ぴかッと光ってそしてすぐ消えるものが見えるであらう。何だと思ふ？

燈明崎——志摩国安乗の廻転燈台の光である。

……「鳥羽より大阪へ」より。

○……志摩の安乗岬の燈台の火を三河の伊良湖岬から君と二人で望んで、いろいろな物語に耽ったことがあったが、もうあれから十二、三年になる。こういう処に來ると、いつでも絶海の波の音を友とする燈台守の生活を思はずに居られない。続いて君のことを思はずに居られない。

……「南伊豆より」より

「伊良湖半島」の情景からすぐに思い浮べられるのは、『安乗帖』の冒頭歌「たびごゝろもろくなり来ぬ 志摩のはて安乗の崎に 赤き灯の見ゆ」である。この一首は『安乗帖』という題名と響きあつて歌集の主調をなす歌だが、従来の研究では「志摩のはて」というやや感傷的な語が問題とされてきた。逍空自身はこの歌を舟での矢湾へ乗り出した時に詠んだものとしているが、眼前の情景を詠んだにしては「志摩のはて」という語が大げさに過ぎるからである。そこで、逍空の愛読していた伊良子清白の「安乗の稚児」という詩の影響が指摘された。「安乗の稚児」は明治三十八年九月号の『文庫』に発表され、後に詩集『孔雀船』に収められた詩である。

安乗の稚児

志摩の果安乗の小村／早手風岩をどよもし／柳道木々を根こじて／虚空飛ぶ斷の細葉

水底の泥を逆上げ／かきにごす海の病／そそり立つ波の大鋸／過げとこそ船をまつらめ

とある家に飯蒸かへり／男もあらず女も出で行きて／稚児ひとり小籠に坐り／ほゝゑみて海に對へり

荒壁の小家一村／反響する心と心／稚児ひとり恐怖をしらず／ほゝゑみて海に對へり

いみじくも貴き景色／今もなほ胸にぞ跳る／少くして人で行きたる／志摩のはて安乗の小村

旅人と稚児の一瞬の、けれども心に沁むめぐり逢いをうたったこの詩の哀切な調子を逍空は非常に好み、暗誦する程だったという。

私は、この詩の影響に加えて、「伊良湖半島」で花袋と柳田が安乗燈台の火光を見る情景の記憶がはたらいて、『安乗帖』の冒頭歌が成立したと考える。この一首は五種の歌集に組みこまれているが、その度に改変されている。校異として

は、歌集『海やまのあひだ』に収められる際に、「たびごゝろもろくなり來ぬ 志摩のはて安乗の崎に 赤き灯の見ゆ」が「たびごゝろもろくなり來ぬ 志摩のはて安乗の崎に 燈の明り見ゆ」といふ様に、「赤き灯の見ゆ」↓「燈の明り見ゆ」となっている点が注意される。「伊良湖半島」の情景そのままではなく、ひとつ屈折させてあるところから逆にその影響が指摘できるのではないだろうか。

「安乗の稚児」にしろ、「伊良湖半島」にしろ、遼空が心惹かれたのはそこにうたわれる流離の生活であらう。「安乗の稚児」には旅人と行きずりの稚児が描かれている。一方花袋は安乗燈台守の孤独な生活を通して、誰の人生も流離をつづけてゆくはかないものだと感じている。遼空の「たびごゝろ……」の一首もそうした人生のはかなさを詠じている。

花袋の一連の紀行文を、少年らしい憧憬を抱いて読んでいた遼空が花袋の旅を下敷きに志摩・熊野への旅を試みたと考えれば、安乗の名を歌集の題名に冠した事も、安乗崎の歌を冒頭に置いた事も頷ける。

更に、遼空における「海やまのあひだ」の語も元々は花袋の紀行文に触発されたものではなかったか。

「志摩めぐり」や「北紀伊の海岸」の文章において、花袋は志摩から北紀伊にかけての海と山の入り組んだ地形を、“海と山の間”という様に表現している。

○素より山と海の間なれば、この参宮街道のやうにはあらねど、人の往来する処なれば、中途にて路絶えて帰り給ふやうなる気遣はなし。

○海に離れ、山に添ひて、猶行く事里許、遂にその鳥羽街の瓦甍を、前なる低き両山の間に認めしが……

○かくてわが何方に行きても――山に入りても海に泛びても――遂に平和を得る事能はざる身なるべきを思ひて、何とな

く悲しくなりぬ。

……以上、「志摩めぐり」より。

○これより半日の間、われは絶えず海と山との間を行き、松籟と濤声との間をたどりぬ。

○路は絶えず山岨水涯の間を行きて、峠をのほり果れば必ず海の景色あらはれ、阪を下り終れば、必ず山の翠微出づ。

○わが今朝鷺港を出では、日出て己に三竿の高さに及べる頃の事なりしが、山隈水阿の間、断江残磯の辺、先初めてわが心をひきて……

○思へ人々、このさびしき海と山との間を、とぼとぼとして過ぎ行く二人の胸にはいかに異れる感のみちわたりたるかを。

……以上、「北紀伊の海岸」より ※波線は筆者が記入したもの。

特に遙空の「海やまのあひだ」と花袋の「海やまのあひだ」が重りをみせるのは、「北紀伊の海岸」で、花袋と少年郵便脚夫がめぐり逢う場面である。（このめぐり逢いについては、遙空が前述の『不二新聞』、「明治文学論」で触れている。）

人も通らない夕暮の北紀伊の峠道で、花袋は一人の少年郵便脚夫に呼びとめられ、彼と道づれになって峠を越えてゆく。花袋は都会に憧れる少年に東京の話をしてやりながら、山で一生を終えるその少年の人生にも、都会生活に絶望して旅をしている己が人生にも、あるはかなさを覚えて次のように嘆ずる。

路はいつか絶壁の間を過ぎて、次第に山路へとかゝり始めぬ。以前の帆影は既に錦浦の湾内に入りて見えなくなりぬ。怒濤は遠雷のごとく長く連れる絶壁の間に咽べり。思へ人々、このさびしき海と山との間をとぼ／＼として過

ぎ行く二人の胸にはいかに異なる感のみちわたりたるかを。一人は若き血胸に漲りて、頻りに将来を夢みつゝあるに、一人ははかなく苦しかりし過去の経験を思ひて、ほと／＼絶望の思に沈みつゝあるにあらずや。あはれこの二人の姿――

“さびしき海と山の間”という語がでてくるのが注目される。遼空における「海やまのあひだ」も正に、人生のこうした“さびしさ”、“はかなさ”から出発しているからだ。

III

花袋の紀行文は地方の人生にしずかな眼を注ぎ、その眼はやがて自身の人生のはかなさに向けられてゆく、という主題を持つが、それは具体的には旅先での人々とのめぐり逢いを通して描かれる。郵便脚夫や行商人や鉱夫……皆、縁もゆかりも無い貧しい人ばかりだ。そうした傾向は花袋のみならず、同時代の国木田独歩等の作品にもあらわれている。

明治二十年代から四十年代にかけては紀行文が非常な隆盛をみた時期であった。旅行家のみならず、歌人や小説家も争うように紀行文を書いた。鉄道の施工もその一因となったのだろう。当時博文館を中心に、大町桂月や江見水蔭、大橋乙羽の諸家が次々に紀行文集を刊行している。この紀行文学の時代に特に活躍し、紀行文に新生面を展開したのが花袋や独歩、柳田国男等の人々であった。後に自然主義文学の旗手となる彼らはこの頃は浪漫主義的傾向にあり、明治三十年四月には、宮崎湖処子、太田玉茗らと共に合同詩集『抒情詩』を刊行し、浪漫詩風の先駆となった。匂い濃やかな彼らの紀行文は、確実に抒情詩の系譜をひくものだが、もう一方の性格としては、自然主義文学への要因も有していた。この頃彼らはドーデーやゾラ、ビョルンセン等の外国文学の影響の下に、地方の生活というものに眼を向け始めていた。

からだ。旅を盛んに行い、山々や海の間に散らばってひっそりと暮らす人々の生活や、心惹かれる出来事を互いに報告し合い、何とかそれを文学の一つの主題にしようとしていたのである。もっとも、花袋と柳田の地方生活への関心については、共通の歌の師、松浦辰男の唱えた幽冥道の影響も濃い。現世と幽界との交流を考える時、どうしても地方の人々の宗教生活が問題となる。明治三十六年三月、柳田と花袋は『近世奇談全集』（博文館刊行）の共同編集をしているが、これは「老嫗茶話」や「三州奇談」等の随筆から魂の行方に関する奇談を抜粋したものである。奇談とはいえ、それらはおのづから地方に暮らす人々の信仰生活を問わず語りしている。

地方の貧しくはかない人生に注がれるしずかな眼。柳田国男の民俗学も一面としてはそうしたところから始まっているといつてよい。若き逍空の心を捉えたのも、自然主義文学云々の枠を超えた、“生活”に対する眼ではなかったか。惹かれるままに、逍空は自らも旅をして地方の生活をうたいはじめた。

道づれとなれる若人　そが一人　口ぶえ吹きて淋しき夕

（吹けは、吹くがあはれるかな）

ことしげき都會ずまひをうらやみてはなしをのぞむ木こりの子ども

花瓦斯の火かけにぎはふ町のこと聞きつさしぐむ山がつの子よ

やすからぬことを口にしたりひぬ旅商人のさびしきはなし

『安乗帖』には旅で出逢ったゆきずりの人々を詠んだ歌が多い。聊か稚拙ではあっても、それは「海やまのあひだ」への確かな一歩であった。逍空の少年時代に台頭していた紀行文の隆盛、そこから始まって、地方の生活に眼を向け、自然主義文学の素地をつくっていった田山花袋や柳田国男等の活動。このような流れを背景に置いてみる時、『安乗帖』及び「海やまのあひだ」というテーマの一つの形成過程があざやかにあらわれてくるのである。そしてそこから、

「海やまのあひだ」は更に大きな方向へと成長してゆく。

明治四十三年には柳田国男の『遠野物語』が刊行され、ここで柳田と花袋のめざす方向がはっきりと分かれる。地方の常民のひそかな生活の一つ／＼堀りおこしてゆく柳田の試みを、花袋は閑人の道楽に過ぎるのではないかと批判する。二人は同じうして地方の生活に注目し、日本人の精神生活に関心を持つのだが、そこから何を目指してゆくか、という段階で大きく分かれていった。民族という単位で其らを考え始めた柳田に対し、花袋はやはりどこまでも小説的な興味で地方の人生を見ているわけである。

遼空は『古代感愛集』所収の「遠野物語」という詩において、大正三年に『遠野物語』を読んで深く感動したとうたっているが、「先生の学問」という文章によると、もっと早い時期、大学卒業の頃に『遠野物語』を読んだといってお(12)り、後者と考えるのが妥当と思われる。すると、『安乗帖』成立の前には『遠野物語』を読んでいる事になるが、すぐにその影響を安乗帖に見出そうとするのは早計であらう。しかしその後、遼空の「海やまのあひだ」は確実に大きな広がりを見せてゆく。例えばその一端は、大正六年の九州旅行を題材として、同年十二月の『アララギ』に発表した「海道の砂」という文章によくあらわれている。著名な部分だが、引いておこう。

尾道に來た。山と海との間の細長い空地に、遠く延びた町である。山の上には、寺の薨や畑や田が見えるばかりで、人はまだ幾程も山を領有してゐない。山陽線を西に走るほど、山と海との接近の度が強くなつて來て、この二つの大きな自然に脅かされて躊躇つて住んでゐた、祖先の生活が思はれる。柳田先生は日本を山島と異名してゐられる。わたしは天野家の稍かけづくりの傾きを持った二階座敷に居て、日本人の恐怖と憧憬との精神傳説を書いて見たいと思つた。

ここに到って「海やまのあひだ」という語は、志摩・熊野という特定の場処に限らず、日本という島国全体を表す語となり、ひいては日本民族の宿命、というテーマをも包含してくる。海と山との間に息づく人々のひそかな生活をみつけてゆこうとする逍空Ⅱ折口信夫の方向は徐々に定まっていたのである。

『安乗帖』にその方向をはっきりと見出す事はできないが、明治三十年代における花袋や柳田国男等のグループによる地方の生活への注目と、そこから発して更に異なる地平線へと広がってゆく民俗学との過渡期に『安乗帖』が成立している点は大いに注目される。そうした時期に逍空も又、“旅”をし、感傷的ではあっても、とにかく歌を詠む事によって、地方の生活に切込みをいれていった。「海やまのあひだ」の原点はそこから始まっていたと考えるのである。

注

- (1) 『短歌文學全集・釋逍空篇』月報（昭和十二年一月・第一書房）
- (2) 同右所収「追ひ書き」
- (3) 長谷川政春『「海やまのあひだ」論』（『國文學』昭和五十二年六月号所収）の分類による。
- (4) 前掲『短歌文學全集』所収「釋逍空年譜」
- (5) 以下、折口信夫の著作の引用は『折口信夫全集』（昭和四十三年発行・中央公論社）に拠る。
- (6) 『折口信夫全集・ノート編』第一卷
- (7) 「山の湯雜記」（『折口信夫全集』第廿八卷）
- (8) 小林一郎『田山花袋研究』第三卷（昭和五十一年・五十七年。桜楓社）六百七頁
- (9) 「自撰年譜」（『折口信夫全集』第卅一卷）
- (10) 前掲『田山花袋研究』第三卷、六百十九頁
- (11) 「インキ壺」（『文章世界』明治四十三年七月号）
- (12) 「先生の學問」（『折口信夫全集』第十六卷）